
黒い悪魔

栖坂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒い悪魔

【Nコード】

N0305J

【作者名】

栖坂月

【あらすじ】

一組の男女がゴブリ退治に呼ばれた。まあ言ってしまうえばそれだけの話です。ちなみにそのお宅は去年建てられたセキュリティ完備の新築アパート、五階の角部屋という素晴らしい条件だったりします。

(前書き)

中途半端にミステリーかなという作品です。

ホラーっぽくはないんですが、そういう要素も入っているかもしれません。

なのでジャンルは『その他』に設定しました。

ちなみにゴブリは出てきません(えっ)

台風が過ぎて澄み渡った空に、白く輝く満月が浮かんでいる。昨夜の嵐が信じられないほどの穏やかな夜空に、男はふと足を止めて天に見入った。

「神田？」

足音が止まったことに気付いて振り返った女が街灯の下で空を見上げている男の表情を窺ったのと同時に、彼の口元が笑みを形作る何かを思い出して笑うというのは、他人から見てもあまり気持ちの良いものではない。

「どうしたの？ 急に笑い出して」

「いや、突然妙なことを思い出したもんでね」

「聞いても構わない？」

腰に手を当てて問う女に、男に対する興味は大して存在しない。

あるのは純粹な思考に対する興味だ。

「大したことじゃない。狸と貉の話だよ」

「タヌキと……何だつて？」

「ムジナだよ。一般的にはアナグマのことを指す場合が多くて、そういう生き物があるワケじゃない。昔話なんかには出てくることもあるけどね」

「ふーん、同じ穴のムジナって、そのこと？」

「ああ、そうだな」

頷いて、男は再び歩き出す。丁度横に並んだところで、女も歩みを再開した。

「で、そのムジナがどうしたの？」

「昔、大正だったかな。狸が禁猟になった時期があるんだ。で、その最中に狸が狩られているところを見付かって、一人の猟師が捕まった」

「まあ、禁猟だつていうなら仕方ないんでしょうね」

「ところが、男はどうして自分が捕まったのかサツパリわからないってな顔で、こんな主張をした。自分が捕ったのは狸じゃなくて貉だ、とね」

「そりやまたずいぶん言い訳ね。ムジナって実在しない生き物なんでしょう？」

「今でこそそういうことになってはいるけどね。当時はまだ知られていない事実だったのさ。だから、裁判にまで発展した。その猟師の獲物が狸なのか、それとも猟師の言うように貉という別の生き物なのか、えらい大学の先生方にまで協力を仰いで調べてもらった」

「それで？」

「結果は明白。猟師が貉と呼んでいる生き物は狸に間違いなく、猟師は狸を捕っていた、ということになったワケさ」

あまりにも単純な話の推移に少しガツカリしながら、女は男の視線を追って満月へと目を向ける。

そこにあるのは闇夜に浮かぶ白い丸。
なるほどと、彼女は納得した。

どうしてこんな話を思い出したのか、というその理由を。

自分達がどうしてこんな場所にいるのか、二人は改めて考えなければならぬほどの別世界に来ている気分だった。

去年まで工事をしていた新築アパートの六階、オートロックを始めとした充実のセキュリティ、広くて余裕のある間取り、大学や商店街に近い立地と、暮らすには十分すぎるほど恵まれた環境が整っており、まるでドラマにでも使用した部屋に招待されているような違和感すら覚える。事実、キッチンでお茶を淹れている華奢な後姿を見る限り、場違いなのは間違いなく客である二人だった。

「……いるのか？　こんなとこに」

「本人がそう言っただから出るんでしょ」

囁きで言葉を交わす二人がここにいる理由、それはゴキブリ退治

だった。それも、この部屋の主である一条七海いちじょうななみの希望によってだ。

「で、何で俺までここにいるんだ？」

「決まってるじゃない。アンタが退治するからよ」

「頼まれたのはお前だろーが。自分でやれ」

「仕方ないでしょ。虫だけは苦手なのっ」

「ふざけんな。ゴキブリくらい自慢の拳で粉碎しろっ」

「無茶言わないでっ。んなことできるワケないでしょ」

囁きで応酬しあう庶民二人。とりあえず、事情は大して難しくはない。一条に相談された女、篠崎が自分にできないと判断して男、神田を引っ張ってきたという次第である。

「……にしても篠崎、どうやってこんな金持ちのお嬢様と知り合っただんだ？」

「サークルの後輩よ」

「サークルって……ポエム同好会のかよ」

「いいでしょ、女の子なんだから。あの子、割と一人でいることが多いみたいだったから気になっちゃってね。親しくなったのは最近だよ」

「ゴキブリ退治に招待されるとは、ずいぶんな親近感なこと」

「そういうのが相談できるって、結構大事なことよ。これっていう友達、いなかったのかもね」

そう思って眺める室内は、綺麗というより淋しくすら見える。広すぎる部屋にいつも独りというのは、あまり喜ばしいことでもないだろう。

「すみません。お待たせしました」

上品な飾りを施されたトレイに揃いのカップを三つ載せて、一条は笑顔と共に居間へと戻ってきた。誰かをもてなすことが嬉しくて仕方がないというような、まるで小さな子供がママゴトでもしているかのような無邪気な笑みだ。ここまで歓迎されては、二人も嬉しく思わないはずがない。

「ありがとう」

「これはどーも」

並べられた飲み物は紅茶であるようだ。市販の缶紅茶では決して楽しめるない香りが湯気と共に立ち昇り、鼻腔を刺激する。二人は誘われるようにカップを手にとると、鮮やかな琥珀色の飲み物を普段の半分程度の勢いで啜った。

「……いかがですか？」

「おいしい」

「うん、美味いよ、とても」

「良かった。いつもは一人で飲んでいるので、他の方のお口に合うか自信がなかったんです」

安堵したような笑顔がこぼれたのも束の間、一条は背筋を伸ばして姿勢を正すと深々と頭を下げた。

「今日は宜しくお願いします。以前からゴキブリは見ていたのですが、こんなに頻繁に出るようになるなんて思っていなくて、正直言うところ最近は少し怖いんです。まるで私を狙っているみたいに思えることもあって」

「うんうん、怖いよね」。ヤツは飛んできたりすることもあるから油断できないし」

虫嫌い仲間が増えて嬉しいのか、篠崎は大きく頷いて同意する。

しかし、一方の神田は少し腑に落ちないという顔をしていた。

「頻繁というのは、具体的にはどのくらいの頻度ですか？」

「えーと、ほぼ毎日です」

それは確かに頻繁と言える。

「駆除はしているんですか？」

「いいえ、以前触ってはいけないと教えられたもので」

「殺虫剤とかは？」

「持っていません」

「なるほど」

一つ大きく頷き、神田は更に思考を巡らせる。一方の篠崎は、お茶だけでは物足りないのかお茶請けに出されたクッキーを冬眠間近

のリスのように喰^むっていた。

「何が『なるほど』なのよ。ホントにわかってんの？」

「食^くっだけの奴は黙^{もく}ってる」

「あんだとー！」

「あ、あの……」

こういうやり取りを見慣れていない一条が、オロオロと瞳を泳がせる。その気配を察してか、二人は目配せだけで休戦条約を結び、とりあえず問題解決を第一に考えることにする。

「もし駆除をしていないのなら、偶然入り込んだ一匹を何度も見ている可能性があります。ゴキブリというと『一匹見つけたら三十匹はいると思え』なんて言葉がまかり通っていることもあって、見えないところにたくさんいるような印象を持ちがちですけど、実際には奴らも生物です。無限増殖するような気味の悪いエイリアンじゃありません」

「そんなことないよつ。アイツらは台所の隅^{すみ}っこにある闇から発生するんだよっ！」

「やかましいっ！」

鋭い裏拳を叩き込まれ、篠崎は盛大に転がっていく。その様子を間近に見てしまった一条は、必要以上に怯えていたりする。

「で、でも……」

「とにかく、ゴキブリを見かけるといっう辺りを一通り探してみましよう。一匹見付けて解決すれば、それに越したことはないでしょうから」

「はい、わかりました」

少々不満を残しつつも、自身の無知を自覚してのことなのか、それとも自分も激しく転がされるとでも思ったのか、とりあえず素直に応じて頷いた。

「それで、ゴキブリを見かけるのはどの辺りですか？」

「えーと……居間だとあの辺りがたくさんいます。台所ならフロアマットの上にいることが多いですし、トイレなら……」

「ちよ、ちよつと待って下さい」

指折り数えながらの説明を慌てて止める。

「どうかしましたか？」

「どうかしたでしょう。そんなに色々な場所で毎日のように目撃しているんですか？」

「はい、そうです」

「あれ、言っでなかつたっけ。何匹も出て困ってるらしいって」
「聞いてないぞ、そんな話」

復活して再びクツキーを貪っている篠崎に、冷たい視線を飛ばす神田。

というより、もしその話が事実なら、ここは立派なゴキブリ屋敷である。正常な人間であれば、引越すら考えたとしても不思議ではない。

「……一条さん、失礼ですけど、部屋はいつもこんな感じですか？」

「こんな感じと言いますと？」

「我々が来るので慌てて掃除をした、というようなことは？」

「少し雑誌や小物を片しましたけど、特に掃除というほどのことはしていません」

「え、それでこんなに綺麗なの？」

啞然として驚く篠崎。

「……お前の部屋に行く時は一週間くらい前に宣言してからにするからな」

「えつと、二週間くれない？」

「どんだけだよっ！」

いずれにしても、状況に対する疑問は更に膨らむばかりである。

「あの、掃除していないことが何か関係あるのですか？ もっと綺麗にしないといけないとか」

「いいえ、逆です。綺麗すぎるんですよ」

ゴキブリというのは生物である。生物であるからには生きている痕跡を残しもするし、気配も感じられるものだ。しかしこの落ち着

きのある清潔なアパートには、その痕跡も気配も感じられなかった。トイレにこそ行っていないものの、この居間と先ほど覗き込んだ台所、そして玄関から通じている廊下と、いずれも管理が行き届いていた。ゴキブリが日夜徘徊していたのなら当然あるハズの置き土産も、少なくとも気付ける範囲においては見かけていない。

「どういうこと？」

説明を求める篠崎にというより二人に対して、神田は口を開いた。「さっきも言ったけど、ゴキブリってのは生物だ。生きている以上は餌を食べるし糞もする。だけど、少なくとも見る限りにおいて餌になりそうなゴミが放置されてもいないようだし、糞と思われるような汚れも見られない。そんなに頻繁に見かけているのなら、これは明らかに何かおかしいだろう」

「何よ、それ。一条さんがウソをついていても言いたいなの？」

「そうじゃないが……」

そういう疑いが無いワケでもない。しかし、だとしたら嘘をついた理由も必要だろう。

「例えば一条さん、この部屋でも見かけるって言ってたけど、それはどの辺りですか？」

「よく見るのは壁に掛かっているカレンダーです。というか、今もいますよ？」

そんな仰天発言に慌てて振り返る二人の視線が、紅葉の風景へと注がれる。だが、季節感のある風景の中に、無粋な黒い塊は見付けられなかった。

「……何だ、脅かさないでよー」

安堵する篠崎とは対照的に、神田は真剣な眼差しを崩さない。そのまま立ち上がってカレンダーへと近付き、ペラペラとめくっている。そして最後の一枚をめくった瞬間、彼の動きは停止した。

「……いた」

その眩きに、部屋全体の空気が変わる。だが一人、最も元凶の近くにいるハズの神田だけは、やけに落ち着いている。それどころか、

眉一つ動かすことなく壁に張り付いていた黒い塊を掴み上げた。

「ちよ、ちよつとおっ！」

あまりの事態に壊れてしまったとも思ったのか、篠崎は震えたシャウトを喉の奥から搾り出す。

「心配ない。玩具だよ」

ひらひらと振りながら、神田はニヤニヤしながらテーブルへと戻ってくる。わざわざブツを持ってくる必要はなかったのだろうが、怯えた猫のように逃げ腰の篠崎が面白いのか、彼はあえて件の黒い物体をテーブルへと投げ出した。

「ホ、ホントに玩具なんですよーね？」

遠巻きに恐る恐る覗き込んでいる様を見てみると、後ろから押してみたくなるのは人間の性なのかどうか神田が考え始めると同時に、それまでほとんど動きを見せなかった一条がおもむろに手を伸ばし、グロテスクな玩具を掴み上げる。上にかざして眺め、引つ繰り返して裏側を観察し、足を引つ張って強度と材質を確かめてから、何を思ったのかパクリと啜え込んだ。

「何をしとるかっ！」

それは恐らく無意識に炸裂したツツコミであったのたろう。篠崎の空手チョップを後頭部に受けた衝撃で啜っていたゴツキーはペツと吐き出され、回転しながらテーブルに着地する。

「……お前こそ何してんだよ」

「いや、つい……一条さんゴメン。痛くなかった？」

「あ、はい、大丈夫です。今のはアレですよ。世間で言うところの『ツツコミ』というヤツですよね？」

「いささか本格的ではあつたけどな」

素人芸にしては綺麗に決まりすぎである。さすがは空手有段者、有事の際における技の冴えとキレは目を見張るものがある。

「でも一条さん、いくら何でもコレを口に入れるなんて女の子のボケとしては問題だよ。絶対に客が引くって」

「客って何だよ？」

「うつさいな。マナージャーは黙ってて！」

「誰がマナージャーだっつーの」

このまま続けると本気でデビューしかねないと判断し、神田は話題の方向性を変えることにした。

「一条さん、どうしてコレを啜えたりしたのか、理由を聞いてもいいですか？」

「え？」

「これがゴキブリの玩具だつてことは知っていますよね？」

話の向きを変えられて少しばかり不満の表情を浮かべている篠崎も、その部分に関しては興味のあることなのか、黙って一条の返答を待つ。

「ああ、すいません。その……初めて見たものですから」

「初めて見たつてねー、初めて見た物を何でも啜えるのかっ！」

「ごめんなさいっ。クセなんですっ」

段々と板についてきたコンビの傍らで、神田だけは難しい表情を崩していなかった。何やらしばらく考え込んだ後、ペン立てに刺さっていたマジックとプリンターの近くにあった印刷用紙を一枚手にしてテーブルに並べる。

「あの、何を……？」

行動の真意が見えないだけに、部屋の主は少し不安そうだ。

「一条さん、貴女の見ていた『ゴキブリ』という物体を絵に描いてもらつていいですか？」

「あ、はい」

不安はアツサリと消え、素直に応じてペンを手に取り、白い紙の真ん中にキュキュツと大きな黒い丸をこしらえる。大きさは大福くらいはあるだろうか、黒い日の丸のようにも見える。

「できました」

「大きさと形は見たままですね？」

「はい、正確かって言われると自信ないですけど」

「いえ、十分でしょう」

提示された情報としては問題ないと判断し、神田は頷きを返す。
「ねえ、どういうこと?」

篠崎には彼の意図が見えないらしい。

「篠崎はどう見る? コイツを見てゴキブリだと思うか?」

「これが……ゴキブリ?」

白い紙には大きな黒い丸が一つきり、仮にそれが廊下に転がって
いたとして、それを何だと思うだろう。

「この大きさ、形、まさかこれって……」

「そう、そのまさかだ」

「新種っ!?!」

「ちげーよっ! 勝手に進化させんなよっ!」

篠崎にかかれれば、シルクハットですら新種のゴキブリにされてし
まいそうである。

「そうじゃない。これはゴキブリじゃないんだ。少なくとも俺達に
とってはな」

「それってどういう……」

「一条さん、貴女が今まで見てきた黒い物体がゴキブリだって教え
くれたのは、どこの誰ですか?」

「え? あー……佐久間さんかな。時々黒いモノを見かけるって言
ったら、それはゴキブリって言うんだって教えてくれて」

「それは大学の友達ですか?」

「はい、そうです。大学で初めてできたお友達です」

「なるほど」

納得顔で頷き、しばらく考えてから再び口を開く。

「幾つか質問をして宜しいですか?」

「え? ええ、構いませんけど」

「この部屋に貴女以外で出入りしたのは誰ですか?」

「私以外だと……入居した時に両親と管理会社の人、それから佐
久間さんくらいでしょうか。あ、今はお二人が来て下さってます」

「その佐久間さんというのは、何度か来ているんですか?」

「はい、三度ほど。少しゴキブリの話をしたら駆除した方がいいからとワザワザ来て下さって。でも、あまり効果がないどころか……」
友人を悪く言いたくはないのだろう。言葉を濁す。

「むしる数が増えた？」

「あ……はい」

嘘をつくこともできず、仕方ないとばかりに小さく頷く。

「ちなみになんですが、その黒い物体に触ってはいけないと言ってくれた人は、それを何だと教えてくれましたか？」

「教えてくれたのはお婆様ですけど、そうですね……それはあまりいいモノではないけど、あって当たり前モノだから、無闇に近付かなければ害はないって」

「そうですね。その通りだと思いますよ。とりあえず一通り部屋の中を探してみたいのですが、宜しいですか？ まだこういうのが隠れているかもしれませんから」

摘んだゴキブリの玩具をヒラヒラと泳がせる。

「はい、お願いします」

快い返事が周囲を明るくする。奇妙な騒動の解決法はわからないままだったが、それでも彼女の笑顔に温かみが宿りつつあることは喜ばしいことであるように思えた。

結局、二人は二つの玩具を携えて、夕飯までしっかりご馳走になった拳句、帰路に着くこととなったのである。

「結局、あの黒い丸って何だったんだろ？」

「さてね。さすがに正確なところはわからないけど、ある程度の予想はつくかな」

二人で歩く夜道が少し違った景色に見えることもあって、歩みは自然と遅れがちだ。その上こんな発言をされれば、嫌でも距離は開こうというものである。

「予想って……ゴキブリじゃなきゃ一体何だったのよ？」

「説明しにくいけど、言葉にするなら『悪意』とか『害意』とか、そういうことかな。ま、根拠も証拠もない勝手な想像だけだね」

「……呆れた。それじゃオカルトじゃない」

「そもそも彼女の言っていることがオカルトなんだよ。痕跡も残さずに大量発生する黒い物体、部屋にいた時も彼女には見えていた節があつた。篠崎には見えたかい？」

「見えるワケないでしょ」

「そう、俺にも見えなかつた。でも彼女はあると主張し、その存在を認めてくれていた人がいた」

「おばあさんのこと？」

「そうだ。それが客観的な事実から判断したことなのか、自身の経験から学んだことなのかはともかく、彼女にとって的を射た助言であつたことは間違いないだろう。実際、彼女は二十年近く、それらを大して意識することなく生きてきたんだから」

「それがここにきて大量発生、か」

「つまり、彼女に何かしらの悪意を持つ者がいるということさ。あの玩具をカレンダーの裏側と置き置きのトレットペーパーの下に設置した何者かがね」

それが単なるイタズラであれば、そこに興味や好奇心はあつても悪意は僅かであつたことだろう。そうであつたなら、仮に彼女がこの玩具を見付けたとしても、せいぜいもぐもぐやって吐き出す程度が関の山だ。

「何者かつて……それって一人しかいないんじゃないの？」

「そうだね。おそらくこの玩具は佐久間さん 彼女の仕業と考え、間違いないだろう。一条さんの交友範囲がもう少し広がったなら、特定には時間も手間もかかっただろうがね」

「うーん……そんな悪い子には見えなかつただけだなー」

このアパートへ来る少し前、少々の混乱があつた。それは当の本
人からアパートの住所を聞き忘れていたことだ。携帯が繋がらな
かつたことで切羽詰つた篠崎は、知り合いを片っ端から当たり、そこ

で佐久間に出会っている。

少し地味な印象はあったが、決して人当たりの悪いタイプでもなかった。

「多分、その子も大して悪いワケではないと思うよ」

「どういうこと？」

「一条さんが言っていたじゃないか。ゴキブリのことで相談したら来てくれたって。おそらく最初はそのつもりで彼女の部屋を訪れたんだろうと思う。でも、あの部屋に入って別のことを考えた」

「別って、何を？」

「ゴキブリなんて話はでっち上げで、単に自分が金持ちだってことを自慢したいだけなんじゃないかってことさ。まあ、彼女の見ていたモノがゴキブリでなかったと気付けなければ、普通はそういう結論に達していると思うよ。そんな所に何度も呼ばれば、誰だってイラつきもするだろうし、ちよつとくらい困らせてやろうとイタズラの一つくらいは思い付きもするさ」

「そっか。それでゴキブリの玩具が……」

「ある意味、一条さんにとっては効果的な嫌がらせだったと言えるんだろうね」

小さな悪意であればこそ、大きな騒ぎに発展することもなく存在し続けたとすれば、あまりにも巧妙だ。

「でもそうなる、佐久間って子は一条さんを友達とは思ってないんじゃない？」

「かもしれないね。少なくとも、しばらくは距離を置いた方がお互いのためだろう。表面を取り繕ったところで、内面の悪意までは消せないだろうからね」

「友達が少ないって思ってたけど、ひよつとしてそういう内面が透いて見えていたりするのかな。だとしたら、ちよつと気の毒かもね」

「ま、お前なら大丈夫だろ」

「は？」

「お前が友達になればいいだろ。あの子のさ」

「んな簡単に言わないでよね。まあ、邪険にするつもりはないけどさ」

人の関係とは複雑だ。理屈ではどうにもならないこともある。

「あ、そうそう、ちなみにさっき話した猟師だけ」

「突然話を戻さないでよ」

「結局、狸を捕っていた猟師は無罪だったんだ。他の人間にとっては狸だったけど、彼にとっては貉だったと認められたってことだな。あ的一条って子は嘘をついたんじゃない。あの黒い物体を『ゴキブリ』だと勘違いしてただけなんだ」

「わかってるよ、そんなこと」

彼の言いたいことはわかる。一条という子は、確かに悪い子ではないだろう。だが、自分の理解できない何かが見えている相手と本当の意味で対等に付き合っていくことができるかどうかなど、彼女自身にもわからないことだ。

「……ま、面白そうではあるけどね」

狸でなくとも踊りだしたくなるような満月を見ながら、篠崎は小さな笑みと共に呟いた。

三日後、ゴキブリの激滅が一条の口から笑顔と共に伝えられることとなる。

(後書き)

作中に出てきた裁判の話は実話です。

事実は小説より奇なりなどという言葉が似合いそうなエピソードです
ね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0305j/>

黒い悪魔

2011年11月4日03時35分発行